モノづくりで拓く川崎産業の未来

特別座談会抄録
神奈川産業人クラブ

神奈川産業人クラブ（三木治一会長＝三木プーリ社長）は福田紀彦川崎市長を迎え、特別座談会「モノづくりで拓く川崎産業の未来」を開いた。〝工都・川崎〟は100年にわたり京浜工業地帯の中核都市として長らく日本経済をけん引する一方、優秀な技術を誇る中小製造業を中心に「モノづくり都市」としてその存在感を高めている。そこで福田市長をはじめ、市内を代表するモノづくり企業の経営者3人を招き、これからの川崎製造業の進む道を語ってもらった。

モノづくりの拠点都市

三木氏

―本日は「モノづくりで拓く川崎産業の未来」を主題に、川崎市がこれからの産業をどのように切り開いていくべきなのか議論を深めたいと思います。まずは福田市長に川崎市の強みをご説明いただきたいと思います。

福田　川崎市は今年7月に90歳の誕生日、市制90周年を迎えました。100周年に向けた今後10年間の市政運営が、日本経済をどうリードしていくのかというテーマに直結すると思っています。

さて、川崎市の強みですが、人口減少社会といわれる中でも当市は人口が伸び続けています。90年前に4万8000人の町で始まりましたが、政令指定都市になった1972年には100万人に、今年は145万人にまで成長しました。2030年まで人口は伸び続け、151万人に達するとみています。

ここで一番肝心なのが人口構成で、若い生産人口をどれだけ抱えているかが重要です。15～64歳の生産年齢人口が全国平均62％にもかかわらず川崎市は68・6％と7割近い。これが川崎市の圧倒的な強さであり、これからも成長し続けるファンダメンタルズがそろっていると思います。

川崎には200近い研究開発機関が川崎市内に立地しています。日本最大規模のかながわサイエンスパーク（KSP）やかわさき新産業創造センター（KBIC）、ナノマイクロ技術を東京大学など4大学のコンソーシアムで研究するNANOBIC、民間ベースのテクノハブイノベーションかわさき（THINK）と四つのインキュベーション施設があるのも強みです。加えてオンリーワン技術を持つすばらしい中小企業も集積している。まさに「モノづくりの土地」です。

―続いて三木神奈川産業人クラブ会長、川崎市の魅力をお聞かせ下さい。

三木　福田市長が言われたように、川崎市はわが国でも一、二を争うモノづくりの拠点都市として発展してきた歴史があります。私から見た川崎市の魅力をお話しする前に、私が社長を務める三木プーリの歴史をお伝えしたいと思います。わが社は1939年10月14日に、川崎市大宮町で三木製作所として創業、今年で75周年を迎えます。創業者の父・三木珍治（ちんじ）が祖父・三木治朗の支援を受け、事業を立ち上げました。三木製作所は祖父の家の庭に1坪ほどのガレージのような工場からスタートしました。

父は発明家でもあり優秀な技術者でもあったので、多くの企業から仕事の依頼がきたそうです。54年に父が発明した「無段変速装置」が川崎の発明展覧会で1等賞を受賞。全国から注目を集め、注文がどんどん来るようになりました。これがパワートランスミッションの専業メーカーになるベースといえます。

わが社が生産した伝動装置にかかわる軸継ぎ手や電気クラッチブレーキなどが、工作機械だけでなく、半導体の製造装置やロボット、医療機器などに使われ、日本のモノづくりに大きく貢献しました。こうした成長ができたのも、川崎市に立地したことが非常に大きく、多くの支援にも感謝しています。

少量多品種で差別化

石塚氏

―日本耐熱線工業の石塚社長にお聞きします。他社では製造できないオンリーワン製品で差別化しておられますね。

石塚　当社は1954年に川崎市渡田で創業し、今年で60年を迎えます。現在は中原区今井上町で20人の陣容で操業しています。当社のような小さな会社が60年も川崎で頑張っているのは、川崎に頑張れる要素があるのだと思います。当社は週休2日、実働7時間半の会社で、一切残業も休日出勤もしません。それでも採算の取れる会社になっています。なぜかというと、少量多品種生産だからです。特徴のある電線は量産要求されませんし発注重量も30キログラムがいいところですから、物流も宅配便で済みます。

私どもの製品はまさに呼び名のごとく、熱に耐えられる電線で、求められる最高耐熱温度は1200度Cに達します。この高温では表面の絶縁体は耐えられても、中身の導体が耐えられないので、銅線ではなく純ニッケル線を使っています。ガス湯沸かし器の口火を点火する電磁弁で使う電線は当社の製品です。繊維状になっているセラミックを電線の上にフェルト状にかぶせて被覆しており、実用新案特許を取りました。大型蓄電装置の壁面ヒーターに用いられるリード線も当社の電線が採用されています。

原子力発電所の炉心安全装置も開発しましたが国内では一度も採用されていません。同装置は旧ソ連・チェルノブイリ原発の事故を受け、当時の科学技術庁から研究依頼があった案件です。後に旧ソ連で採用され、原発の安全性を高めました。

―松波社長はユニークな起業でマスメディアで取り上げられています。さらにわが国でもトップクラスのラリーレーサーという経歴の持ち主でもあります。ご自身の起業の経緯をお聞かせいただけますか。

松波　私は三つの会社を経営しています。まず一つ目は東科精機。私が30歳の時に父が亡くなったため、経営を引き継ぎました。ガス警報器や濃度計、オンリーワン技術ともいえる原子力発電所の二次冷却水の塩素を10億分の1（ppb）単位で図る測定器、発光ダイオード（LED）船内照明装置などを開発、製造、販売しています。

二つ目は日本ヴューテックで、40歳で起業しました。16年前に後ろの見えない商業車やトラックで、乗用車と同様の後方視界を実現するカメラとモニターのセットを発売しました。4年前から、その高い安全性が認められ、とても良い状況になっています。

三つ目は日本エレクトライクで、60歳の還暦を機に起業しました。ラリー仲間であり、自動車工学の第一人者の草加浩平東大教授に電気自動車を開発したいと相談し、日産自動車の優秀なエンジニアを紹介してもらって起業しました。

エレクトライクとは電気の3輪車の意味です。かつて「ダイハツミゼット」という小型3輪車が大ヒットしました。これを電気自動車で再現しようと考えたのです。大手自動車メーカーは乗用車感覚で電気自動車をつくっていますが、これはガソリン車と同じ性能を求めてバッテリーを多く搭載します。このバッテリーが高価なので、なかなか普及しないのです。わが社では軽量で小回りがきき、宅配用に最適の3輪車開発を進めています。これなら車体も軽く走行距離も短いので、必要なバッテリー容量は乗用車タイプの6分の1ですみます。いくら良いEVでも高くては売れません。そこでインド最大のオートバイメーカーであるバジャージの「オートリキシャ」をベースにした宅配業向けの車両を開発中です。車両価格100万円以下で、軽自動車よりランニングコストが安ければ必ず売れると確信しています。5年以内に月間500台の国内販売を目指します。

出席者

川崎市長　福田紀彦氏
三木プーリ社長　三木治一氏
日本耐熱線工業社長　石塚敏夫氏
日本ヴューテック社長　松波登氏

〈司会〉日刊工業新聞社横浜総局長　糸永正行

新幹線の駅を川崎に

福田市長

―川崎市を拠点とする企業がいずれも非常にユニークなことが分かりました。ここで福田市長に市の産業振興策についてお聞かせいただきたいと思います。

福田　川崎市経済労働局の職員は公務員らしくない公務員と言われます。かなりおせっかいな職員なんですね。市内の企業を足繁く訪問し、現況や課題を聞いて回る。こういったおせっかいをこれからも続けていくつもりです。おせっかいをすることで、それぞれの企業が何をしているかを職員が理解して、「ここをつなぎ合わせればもっとすばらしいイノベーションができるのではないか」という発想が生まれる。

前市長の時代から、川崎のイノベーションはグリーン、ライフ、ウェルフェアの三本柱で推進して来ました。市長が代わったからといって簡単に変えてはならないと思っています。せっかくここまで育ててきたのだから、さらに大きく成長させていくことが重要だと思います。

さて、ASEAN（東南アジア諸国連合）のマーケットは大きな広がりをみせています。羽田空港からASEANまでは5000キロメートル圏内で、ニューヨークーロサンゼルス間に相当します。米国のビジネスマンが毎日のように行き来している距離です。日本電産が中央研究所を京都から川崎に移転させますが、最大の理由は羽田空港との近さだと社長が明確に言っていました。ASEANを含め、アジア主要都市の研究所と日本をつなぐ拠点としては、羽田に隣接する川崎が最高ということです。

アジアとつなぐ拠点に

松波氏

―ここで経営者の視点から、川崎市に何が足りないかを述べていただきたい。欧米で「川崎」というと、オートバイのカワサキが出てくる。いや川崎はすごい都市で、東京の隣のすごい都市なんだといってもなかなか理解されません。グローバル化時代ですから海外に対しても「川崎ブランド」を確立してほしいと思います。

石塚　地域を代表する人の講演を聞くと、海外進出の話ばかりなんですね。これでは困ります。国内産業が空洞化すると大騒ぎしている割にそういう話ばかり聞かされると、耳をふさぎたくなります。海外進出を推奨するのではなく、日本製品の輸出や国内企業のPRなどを積極的に支援してほしいですね。

松波　現在、当社は商業車向けのバックアイカメラを生産していますが、川崎市には「川崎ものづくりブランド」認定や助成金など多くの支援をいただいています。しかし市清掃局に1台も装備されていないので売り込みに行きましたが、窓口の職員と現場がつながっておらず、実りませんでした。販売ルートの問題もあり難しいでしょうが、新しい製品が出た場合は現場でも協力してもらえるシステムがあればと考えます。

―ここで産業界から川崎市に提言があればお聞かせ下さい。

三木　このところ製造などで日本回帰の動きが出てきました。私どもも中国に工場がありますが、日本に持ってきた方が良い製品も出てきており、国内のものづくりを強化しています。川崎は一般的な意味で従来型の製造業がふさわしい都市かというとそうではない。医療やエレクトロニクス、ロボットなど、もっと最先端技術に力を入れるべきです。〝川崎クオリティー〟や〝川崎メード〟がブランドになるように、最先端技術でブランドづくりをお願いします。

石塚　私どものような小さな会社でも研究開発はしています。ただ、神奈川県産業技術センターやKSPなどの施設があっても、設備とか実機テスト用装置が不足しています。結局、私的研究機関に依頼しますが、高額にもかかわらずそのお墨付きに効果がないんです。やはり公的機関のお墨付きがないとだめです。ぜひ、公的研究機関の新設を検討していただきたい。

松波　政令指定都市で新幹線が走って駅がないのは川崎だけです。武蔵小杉が有力候補になると思いますが、若くて評判の良い市長に声をあげていただきたいと思います。言い続けたら可能性が少しでも出てくると思います。これはいろいろな産業政策につながるのではないでしょうか。

―最後に福田市長に川崎市をどのように変えていくのかをお聞きしたいと思います。

福田　まずブランド力ですが、川崎は2005年から10年間、「川崎市シティセールス戦略プラン」を進めています。10年に1回という悠長なプランではなく、もっと機敏に対応できる計画に変えようと思っています。例えば川崎・殿町地区でライフサイエンス関連企業が相当集積してきています。5月1日に総理大臣から国家戦略特区に指定された「殿町」は、今やライフサイエンスのブランドになっています。

ウェルフェアイノベーションでは「KIS」（かわさき基準）というウェルフェアに関する基準を持っています。実は国内外のどこにもウェルフェアつまり福祉産業に関する基準がないのです。この基準を始めて7―8年たっていると思いますが、国内のいろいろな地域からKISを取りたいと応募してくるわけです。

川崎市では厳しい環境基準をクリアしてきた企業と公害防止条例を40年前に制定した市が、官民一体で努力した結果、世界で最先端の環境都市に生まれ変わりました。毎年2月には「国際環境技術展」を開催していますが、今年は17か国から200人が来場しました。このように良いものをブランディング化して発信することに力を入れていきたいと思います。

独自の基準をつくり、最先端の取り組みをすることで、川崎ブランドを国内外に広めることになるでしょう。こうした政策をしっかりやっていく考えです。

―本日は貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

アセコート
超耐熱電線

【用　途】
■工業用ヒーターリード線
■成形機・押出機・機器周辺配線用
■データ用ケーブル
■高周波誘導加熱ケーブル
■耐熱型同軸ケーブル
■半導体装置用ヒーター
■鉄鋼向け計装用ケーブル
■サーミスター用リード線

対放射線性高温用センサーケーブル
クリーン対策（Max400℃）耐熱絶縁電線

耐熱電線の総合メーカー
日本耐熱線工業株式会社
代表取締役　石塚　敏夫
本　社　〒211-0067　川崎市中原区今井上町81-1
TEL.044-738-0215㈹　FAX.044-738-0450
E-mail：info@nittai.com　URL：http://www.nittai.com
北九州営業所／台北出張所

電気三輪自動車
エレクトライク

地球温暖化、CO_2削減問題に寄与。
最先端の技術を搭載し、安心・安全に乗れる三輪車。
川崎市内の宅配事業、建設業、雑貨販売業での実証実験。

■ 工業・船舶用ガス検知の製造・販売
http://www.toka-seiki.co.jp
TOKA 株式会社東科精機

■ 電気三輪自動車の開発・製造・販売
http://www.e-tric.co.jp/
株式会社日本エレクトライク

■ トラックの後ろが見える「リアヴューモニター」
http://www.nvt.co.jp
株式会社日本ヴューテック
〒211-0066 川崎市中原区今井西町93-3　TEL044-722-2211